雙蝶記

一名霧籬物語卷之六

春曲彫蟲　應大兄之需

京山人象

欲
181
6

ヘ13
181
6上

東京學藝大學
文化13
181

雙蝶記 一名 霧籬物語 巻之

明治四十年十月十日 千葉縣[illegible]寄贈

江戸　山東庵京傳　編

十四　蟋蟀枕と床と野宿の妖怪

去程に嘴元動之助は復讐の願ひかなひて。俄に行装をそのゝ吉日を
ろうば。一僕と共に唯独りぐゝ色を背ひ鎌倉を発足し。おりふ旨や
あらうと武者修行とのゝ。越中國とゝろざして出去ぬ。偖越中國立山乃
連山に蛭牙山とゝふ廣大なる山あり。根は地角に盤り。頂は天心に接り。遠観
ば雲痕と磨断し。近看ば月魄と平呑し。深嶺幽谷の裏常に雲
霧と竜て晴る時も山口に鳥獣あり。栖ゆゑに樵者寺もあり。とゝへば
半山より奥は人跡とゝえて其奥ときいろ知者なゝ。比しも秋の日めり。

回国の修行者とおぼしく。笈を負錫杖をつき。鉦と打ちしてかの蛭牙山の半山より
のがり。行暮て宿をもとめ所なければ。野宿すべきいふぜんとおもひまどひて。彼方
此方を見渡すに。こるひしの茂林の裏に一つの社あんえんとしたれば大ふよろこび。
草のかきねくだりの径路をたどる。萩紫苑女郎花のたぐひの草どもいと高く
生のびて。露滋裏に分て其処に去てあるふ。あれにきこうなのしまぐひて。
人も住ざる古社なり。笈をもおろして裏に入こもやうにあるふ。神前とおぼき処い
奥深くていと暗蝙蝠など飛さわぐ。祭祀の具もあるべし。いかなる神にか
ましますらん。軒端にうつき朽目に苔蒸て垣衣生茂り。月も時雨も漏べき
さまなり。蔀は崩て鳥の巣といとなむ処なり。翠簾は破れて蜘の糸
をもてぶ便なり。床は落葉敷なり。塵うづ高くつもりて獣の足
跡おびただし。高欄瑞籬ふる朽て林の裏に倒れ。ひざまづくに年をふるとも

あれぬ松杉のしたひ深く立竜枝葉茂て社の上に打おほひ。物さび寂さ
いとうとし。修行者は野宿をもとめ所なしとおもひて。社の庁隅に笈を置
油紙帳を取出して敷物とし。あぐらく休息しるる。松吹風谷の水音耳近
ひぐらしひまなくふ聞ゆる鳥の声のうちにいろくるいろくに鳴虫の音の哀しるる。凄凉
寂寞として人めづらしげに豹脚を人身うちを螫ぶぞ。目もあいねぶ睡もつるぞ。
あぐらくおりてむかふの方をとろとろふるはやしたる。秋かぜ火の光六つ七つ乱
飛狐のたりを火をおりふ漸くに近くなるとあれば。百姓とおぼしき者
大勢明松を前に照し。注連をとろる棺を舁。幣帛を持此社をのぞ
みて来てあるのふと聞バ「嗚呼村一番のうつき此娘人身御供に
なるとのふかふ支「あのう年は八つ親の歎きいかばかり。何がうそうて
あん神へ。あきあい娘食ふぞ。悲き月と見る夏よと。餘所の哀と諧て。社の

前ゐ棺とそ多。其上ゐ幣帛をさ〜夾み。皆くひまふ〜ぬぐきつ。ゆん神ゐ告奉る。ゆん望の饌とうに供じ奉まゐ田畑とあ〜しさまゐ様ゐねぎ奉るとゆふ間も身の毛そばだちて「やく腥き風が吹。明松を吹消ん。そや風がとのひさ〜て胸とひや。魂とき神て打ゐあ〜き。我先ゐ〜あ〜そひて。こけつまろびつ逃飯る。修行者い社の隅ゐ身をひそめて此ゆふ様見聞。さて〜此社ゐ変化ゆえて物ゆる者とうるくゐ。我さいひゐ此ゐ病を変化と退治して諸人の難を救だやとおりひて。錫杖ゐ仕篭る刀を抜かけてゆうかびてそ居うる。漸時うり夜嵐えげ〜う吹きうりて飄々と梢とゆふ。青葉を吹落〜いとりのもそ〜ゐ時〜もあれ。奥深神前俄ゐ鳴動して足音ひ〜〜とひゞき。翠簾とうゐゞる音ゐどして。あ〜ゐ出ゆる変化の姿白き薄衣のやうなる物を頭ゐかゞきて。正体い知

ざれ〜ぐ。かの棺乃そば近く歩ゆ〜ゆる。銀の戟と打曲ゆるやうゐる凡生鉄の針とうゐゆゆゆるやうゐる毛生ゆる手をさ〜のべて。棺の蓋をありくと爬破ゆるゐ。不思議や棺の裏ゆりも手を出して。変化の手くびをゆゆと掴。忽棺を踏破ゆて。前髪ある若者旅装束ゐて包を負白羽の矢を握てあ〜ゐ出ゆる。是則別人ゐあらず。崎元動之助氏邦ゆり。変化ハ手を振払ひ。動之助を掴ゐ殺ん勢ひゆり。修行者い変化を目がけ。錫杖ゐ仕篭ゆる刀を抜て唯一打と斬つゐる。変化いとやく身をくゐ。頭とのぞゐび身を沈め下を払へバ飛上る。動之助い生捕ゐやゆゆゆるゐゐや。空虚をうかゞひ変化の腰ゐ組つゐね。変化い背後ゐ手をまゐ。動之助ゐ襟首つゐ。引のけんとゆる所を。修行者ゐ呀と声ゐけて打ゐ刀。変化の脇を斬落せん。動之助いゆゆゆるゐと退。其間ゐ変化ハゆり抜て

ひさ消やうに失さりぬ。修行者は暗裏に動之助と変化しつゝ、又斬つくれば飛もとりて抜合せ下こゝ斬合ゝ。雨雲の絶間より月いづる月のさやけさに互に顔を見合せて「和主」「おん身は」「こゝ」「そ」けどとたゞひに驚きかゝとひそて鞘に納さめ。先修行者いひけるは。和主は何故に棺に入て此処へ来るぞと問れた。動之助いひけるは。其不審は理なり。我亡父の仇をうつなり。武者修行にて當国に到る。昨夜此山乃麓の村長の家に宿をかりんといひ入しに。主人夫婦をはじめ家内の者都歎き悲ミ居るゆゑ。何故を愁るぞとうつなしに。近頃此蛭牙山乃木枯の森の古社に邪神ありて。月毎に一人づゝ女と人身御供をする故あり。これを供ぜねば村くの田畑とあし。許多の人の難義なるゆゑ止こゝに得ぞいとこゝに子とこゝる者数れど。其こゝん子のある

家に白羽の矢の立故あり。是其こゝ也。我家にも其矢立しゆゑに。今年八ツに成る娘を人身御供にそなへ。其故に歎くなり。其矢に則我携へる此矢なり。我夫を聞こゝに迎おれた。其主人にこゝ

せよとのひつゝあ。我其娘にこゝて此棺の裏に入。百姓なるゆゑ娘に成此処より早れ来るゝ。呆て推量にこゝるゞ。今おん身の斬落しる変化の腕をこゝ見へゝとゝよゝ。修行者かの腕を取て月の光にかゝくれば。是真の腕にあらず手覆なる物に怪き物の爪ありて色き物のもこゝそこゝる物なりけり。修行者へこれと又かの矢を見。さて真の変化にあらず。曲者乃所為に疑なし。打こゝそこゝ残念なれしとゝ動之助いひけるは。曲者こゝにありこゝれど。かくこゝうこゝと耳語。修行者も何にこゝ耳語ぬ。動之助に打こゝづき。路上の説話草裡人にこゝて。ある山中にこゝて

容易ふ密事ハ語ヲ[illegible]。拙者ハ此山奥ふ分登て猪子[illegible]。
[illegible]ハ互ふ立別再會の時いろ〳〵修行者又耳語て。枯木の枝を
ひろひ集て明松ようこれを。動之助ハ火燧袋を取出し。火を打出しく
明松ふ燃し。両人これを分ち取。ぶひふろふ旨やありけん。動之助ハ山奥
の方。修行者ハ麓の方。別〳〵ふ出去ぬ。かくて動之助ハ明松をふり照し。木ノ
下露ふ袖ひちて。山深くのぼりゆくふ。径路盤曲〳〵ひまれる険阻さり。
人跡ようて深山ふれど。梢とつふ山猿岩間ふもとく鵰巣も。人あかぐる
風情さり。狼の吼声ハ山響ふひびきてをさまりく聞ゆ。山蛭ハ肉ふ喰入て
鮮血を吸痛ふ堪ざれば。蛭牙山と名づくるも宜也とおりひて。あやうげなる
阻とつたひ。苔むるあるく岡橋を渡などして行くふ。峯越の風ふ明松を吹消さ
れたる。岩根ふひ出る所ふ尻ふけてやすらへ居るふ。松林の裏ふあく

しき大男二人歩ミ出て動之助ふ向ひ雷のおちかくるだかりの声して
いく。汝ハ前髪ふる弱輩さるが。何ものの為ふ夜中独此山ふのぼるや。
此山の半より上ハ人の上るべき処ふあらざるふ。見うけふ似ぜ臆ふ[illegible]奴ふ
しるふ。動之助此者等を見るふ身材高く眼ハ狼のごとく。鼻ハ野猪の如く。
髭ハ熊のごとくなるが。峯茅茅をもて編る頭巾をかぶり。蒲擘手をかけ。
岳菅の脛巾をゆひ。山刀の長きを帯。一人ハ矛をもち一人ハ鐇を提さり。
さるくの者さらば打驚べきふ。動之助ハ臆〳〵さるくきを見せば。かくる山中
を夜ふ入て独上ること。心得さくてあるべきか。汝等ハ何〳〵ふ[illegible]
見るべきぞとのふ。かの者等ハ呵〳〵と笑いふ〳〵腕ふ[illegible]奴さり。汝ま
ち手さまあらば我〳〵と勝負を決せよ。万ふ一つ我輩ふ勝ことあらば
此山ふのぼるべし。若負さば活しておく。動之助莞尓と笑ひ我ハ

武者修行のしるふ旅をする者ゐた。そゝ望む所ゐり。いそぐ勝負と決をべーといひつゝ立上りて身がまへをした。先一人矛をひ移りて突かゝる。心得うりと刀を拔飛上りてはらりと打。流るゝ丁と斬。風ふりゆく胡蝶のごとく。雪と持る柳の枝の弱氣ふ見えて強がごとく。柔よく剛を制する手練ゐ人うゝぬ太刀まぢりを見うまて残る一人も。鐺をさゝげて斬つけうり。動之助(二人と相手ふ小太刀のあらひ。牛若丸が鞍馬ゆて。木の葉天狗と戰しを。今見るごとき形勢ゆて。勢まもく猛りゐれば二人の山人何ゐ以て敵さぐき。高這してぞ逃去ぬ。動之助ハ刀をおさめ。かの奴原ハ山賊しをりゐれど。能しりの撩者ゐ。何ふまれいぶゝき者ゐり。此山の奥ゐ入ゐあるべゝぶとゝひつ。清水を掬して咽をるかし。明松も燒尽しゐれば月の光ふ雲ゐて上りゆふ。いまぐ初秋ゐれど。深山のゆゐふ。冬乃時の

ゐく。寒風肌へしりて堪がゝ。かくてゆきくて猪の如ふ道ゐふゐ雪ふ到ればゐ。蔦葛ふ引つき木の根岩角を階ふ踏ゐらうゐてゆふ。やうく一條の路ある所ふ出ゐり。さて四辺をゐりるふ。此辺ハ草木ゐ生ゐ。ゐ峙しる岩石ゐ。都て目馴ざる物ゐり。孔雀石緑青石紺青石石英琅玕石牡丹石木賊のごひゐ。山中ふ海石のまゐ出るゐ一奇支ゐ。蟹石蛤石のごひの貝石ゐり。路のゐ〻ゐにあり。沙ハ金色ゐるゐあり。五色ゐるゐあり。方解石ハ鑿ヒとして餅を刻るごとく。舍利石ハ皓々として露の滋ふ似ゐ。珠ふ怪むべきハ野曝の白骨と散しゐきる如き石ゐ。是ゐる野曝石ゐるべし。是等の玉石奇石玲瓏ゐる月の光ふ輝ゐ。(好景ゐ)いゐれど。人間を出て仙境ふ入しゐを疑ゐぬ。其外ゐんもゐ〻ゐ聞を傳ゐる奇石おゐゐれど。動之助ハ奇異のおりひを[illegible]。ゐ〻ゐく四辺をゐりてぞ居ゐる。

五　宿かして名とかの〳〵とする化石の鍋蓋

萬仞の青壁剣を削り。千丈の碧潭藍ふ深し。磈々たる蛭牙山の奥深。玉石奇石交て。こむ巖をきりひらき。つゝり刻する草屋あり。苔むしたる白石樹ハ青龍の雲と出るふ異うべし。あらふ伏する黄瑪瑙ハ猛虎の風と起るが如く。かゝハ深き谷川ふて。張音のもとゝゞく。石鐘乳ハ時ふ〳〵ぬ軒の氷箸とあやまるし。石燕の飛外ハ鳥とかゝぬ所なれど。住ハ都とおりふゆや。篝火とゝふ此家の娘あるドの留主ふ唯独灯火ふ向ひ居て砧打手のさゝげふ。折節来る獠者の。昼狐の髭四郎あるドの留主を見こみて。簀子の上ふの〳〵上へ。ぶこする声ていひ入るこ娘夜ふ仕度とゝりもさて。こちのゝふ聞やされ。あゝ〳〵花を此様ふ。深山木ふして朽さるる便ふさよ。折く来ていふ如く。こちの心ふもこゞ。此山を連て

退都の花とおゞむる氣。得心ふ入ていふぞと。ひてひしくと寄そゞ。突倒し。あゆけゞゝ〳〵田さるの留主と入ゞ。来て嘯ゞ妾をせむるうゝさよ。田さるふ告さゝえ。辛目と入るぞと。ゝふとも聞ど又さゝ寄て猿程と捧やうる身ぶりをされ。娘ハうるさくおりひ。搗衣の杵で頭をそゝと打退る。髭四郎ハ頭を打まてゝ立て。手負猪狼のごとくと〳〵ど手捕ふる男ふれど。意ふれべこそ格のやうにうゝ。しく我ゝふ支とうけひゝね報ふ此家のあゝド雲根の老女のわき仕業を。縣司ふ告きゝえ。やゞて憂目と入るべきぞとゝひて立と引とゞ「それと告てもむべき」「ともれ〳〵ゞうけひきたまと」ゝふ娘ハ口ごゝる「ゝゝうゝせきそゝゝふく〳〵ゝゝれて娘ハ胸ふ釘。尚産をあゞむき母ふ告いふもゞゞ心をゞゞめて笑顔とつゝり。さゞゝり深くおゞを心と。無解ふ聞んも心ふ。

いふもそのそのふもとぐみーとぐ細目ふあり。それハ実らあるうまーと。掌を合して拜て。ちーぶ後刻ふ此背後の岩陰ふ去のぶべー。よ時分これと吹て相量をと。いひて鹿笛を取出して娘ふ与へ。灯火消て合點ゝと。むくつけき山人も哀ゆハ心をうやまーふ。先酒買て いとゝぶーと。穴熊の一番鎗を突ーとるこちらーて。独赤ひ飯ヱくり。娘ハあとふちゝ立顔ゆて自頭をさげて。今朝結ゞ大支の蝉髪を。此やゝふそゝのさーるゆくさよとひとりごち。再砧を打居ゝう。彼所ふん動之助ちぐーやそゝひ居ゝうしゞ。遥むーふ火の光ひーゆきて。砧を打音聞えそれを。ひのゝ人家あるゝあとありひつ。火の光を目當ふゆきて。彼草屋の門ふ彷徨。ゆくひまゝ裏とうぐひんて。ふ十七八なゝ娘美麗娘紅のこぞのの梅の小枝ふ春霞立田の山の嵐ゝとふ文字を

縹ふ染抜る木綿の振袖を着ゝる。帯ちどけなくひき結び。額髪の顔ふこぼれかゝるえもいはれぬ。人の斬首を臺ふー。人の腕を杵ふて搗衣てぞ居ゝうける。かく人跡ゝえる深山ふ人家あるゝいぶーふ。世ふもぐれて美麗娘唯独人の腕首を砧ふーて。平ヒゝるけーきそ怪ーそれ。これハ真の変化ゆや。何ふまれ宿と乞て試べーとゝもりひ。門の戸を打ゝきこれハ道を踏迷て難義ふもゝふ旅人ゝう。一夜の宿とゆぐ。ゆくと声ゝるふ娘ハ砧の手とゝぶ。いかてハ人を宿を家ゆ彼処の谷ふくぐれば麓ふ到る道ありゝとく。ゆきゝくといふぞ。ゆくあゝぶふそる。ふ娘ハ其いくゝせぞ。こゝハ情の心とりて此ふやどきーとゝふふ其心をゝで死地ふ入と好命ちどの旅人やと。口の裏ふ呟ゞかのゝふ聞えそれハ益ゆーく。宿ゝを支のゝぶ。少刻のあひだ休せてよとて。ゆいそぐく

越中國立山岩窟奇石洞冒

戸とさけび娘ハ腹立しげふ立上りて歩を出戸と引あけて月あるふ動之助が容と見れば玉とわざむくだりふ美麗若衆なれば忽眷戀の心と起して心頭突々と跳あるもせど打まもり居るゞ有てひるゑ主人の留主とひゆゑあるて人と宿しがてくあるんど。ゆん身をうたゞ妾ゞ命ありえてと宿してくおりひとゞるゑ。いざゆくといひて手を取て裏ふ迎ゑるゆぞ。動之助ハ身上の塵を打払ひ脛巾とさき草鞋とぬぎなどまれば娘ハいそぐりく筧の水と石の鉢ふ汲入て足とあらへば。何ゆゑあんん黒き石と囲炉裏ふ打ゑゞて火と燃し。此ハ深山ゆゑふ寒さもさ中のまゞ初秋なれど見あふゞく妾ハ綿入と着たゞり。あん身ハ夏衣なれを寒さん堪ゆまど。いざ火ふあるて身とあるゆゑあゝ山ふ踏迷ゆひさゞふびゝりあびゝれん飢もまゝひてゝんなれど。ゆる石山ゆく辛菜一房ばくり得

ざれどもゆ桑もゞき物もゝ。ぜゆてこれゆりゝゆゝひて。折敷のゝふ白き糸のやゝゆる物と盛て出ず。動之助ハいそゝのありきと謝しゝ之と食ふ。少し甘味ありて忽飢と忘ゝり。これハ何ゝゝ食物ぞと問るふ娘いゝく。他ふゆき物なれば知ゆゆゝと宜也ゝ石麩といひて此あゝりの岩窟ふ生る物ゆて我くゞ平日の食ゆりゝふ。動之助ハこれと聞よくくなれば折敷と石なれば益いゞゝり家内とひゝるふ砧の腕首と石ゆて。火桶灯檠糸車麻笥。鍋釜の蓋擂槌擂盆切机のゝゞひの雑具もゞて皆石なり。其ゝちふと石の枕ハ昔語の一ッ家と見ひ出しておもゝ見れば。轉いゞゝて其ゆ多ゝ問ふ娘いゝく。此延ハ王石奇石ゆれば。奇石ゞ洞とゞびひゝゝとゝる谷底ふ川ゆゝ。ゝゝ沙ゝ物と其川水ふひゝゝおけばおのゞゝ石ふ化と。ゆゝふ化石谷とゞけば妾ゞ家の雑具もゞて石なゝ皆ゆの谷川ふひゝて石ふせゝゝり。ゝゝもれば万の物ゝく

うして破損まるゆゑなを。今炉火ゐ焼るハ石炭ゆ。此灯火ハ燃石とゆひて
よく燃る石ゆ。明松のくりゐもして燃ゐとゆぞ。動之助いこれを聞。さてハ聞
ゆふ化石谷といふハ此処とやうく不審ゑれにゆ。さて娘ハ振袖乃
袂と口ゐ久　背後をゐふりそひて。いとろづりげゐいひゑゑいけ丈の風ゆや
京の女郎田舎の女郎ゑゑ石となるゑ。都の花の京女郎も。深山木の田舎
女郎も心の實ゐ二ツ有ゑ。女子の念ハ岩をもとゆ。ゆ男をゑふて。
石ゐもるると聞ゑぞ。日陰の木ゑふ有ゑゑて。石ゐ花咲谷もゆ。岩間ゆ
清水ゐも。月影ハゆるぞゑ。一河の流も他生の縁。今夜お宿をいたそ。
深きえゐとおびさぶやと。心の裏とかのゆゑ。人ゐ馴れおもしゆ。顔ゐ紅葉
の木の葉石。磨わげる水晶ゐ緑をゑびと額髪。ゑれゆる白ゐ口紅ハ沙の中の
珊瑚砂顔ゐ袂の隅垣まゞ初戀の咲をゆゐ。蒼の花の石梅ゐ。色と含て

ゆゑゑ。動之助ハ娘ゆ戀と幸ゐ此家の様子をうかゞはやゝ心ゐうゞ。落花
ゐ心あれゞ流水ゐも情ゆり。さゞりゐおりひゑゆる志きゝ。わゞゐおりハぞと。
靡ゆふる糸薄ひゑゑゐ落る白露ゐ濡の緒ゆゑびゆれた。娘いゑりさ
かゞりゆ。動之助ゆ手を取て。一間の裏ゐとゑゐ去ぬ。かくて時刻も
やゑゑ。山風ハいと烈くぞ吹渡る。此家の主ハ雲根ゑゑる老女ゑ。雪を
あざむく白髪を肩ゐ打乱し。いく年ゆり女蘿の古松ゐゆゑゑ。
面ハ節木のやうゐゆりびゑるゆ。石綿ゑゑゐ物をとりて織ゑる衣の裾を高く
かげ。かゞ手ゐ弾ゑゑる弓ゐ猟箭を握ゑゑ。かゞ手ゐ兎を提老を
見ゆるる健さ。谷の険阻をのがりて。家路ゐ飯り門首より。娘今ぞゑゑ
娘くとよびゑゑだ。かゞ丈火ハ一間の裏を走丈出ハいりもんゆりのゑやゑ
ゑゑだ。今夜ハ山風さゞぐ丈ゆゐ。鹿も猪も驚き走ゑて手ゐあゞぞ。化石谷の

岩陰ゆそやうく此鬼一口とりて飯アまぬ。酒ハ昼ハど買てあり。是と香ふ寐酒飲ん
と。ひのつ〻わりと見まゝて。脛巾草鞋ゑどのとき捨てあると見つけ。旅人を留ーと
ゝた。娘ハ筧の水ふ手を清めて。さんばい道を踏迷ひーそける旅人と宿ー
たゞりとゝふ。老女ハうかづき。そゝよくせーぞ。いろる体の旅人ゆや。我まゝえて試べー
奥の間ふそゝべ此ふーりゑとゝふぞ。娘ハ心得つゝひて一間の裏ふ入動之助と
連て出来ア。これハ妾が母ふたゞりとゝた。動之助ハ宿とゆし礼とのゞゝたゝふ。
老女ハ動之助が為体をつ〻くゝ見て笑顔をつゝり。ゆゝ山深き栖ゑんべ万支
ゝゑぬがらゑれど。若ひびくくもゆびゞ。ゆるやふ旅のゝれと休ゆゝとゝいと懇ふ
ゝべ。娘ハ母の詞を幸ふのう旅の郎。母もゝゝ女ゞ十日も九日も十年も百年も此ふ
ゆゝ。ゝゝゞと見捨て出去ゝゝと。ゝふ詞のゝゝゞふ。自然と癒へゆゝれぬ。動之
助ゝ打とけて。母子そゝひての厚き情。謝ゝべき詞ゝゆゝどゝゝべ。老女ハゝ笑て

ゆん身ハいづくゝりいづくゝの旅ゝゝや動之助ゝりていひゝゝ。拙者ハ原下絵の蒼
飾ふ住武士の浪人の子ゝるが。繼母ふ憎まれて追出され。立寄べき陸ゝゝゆゝ。
越後の國ふある少の所縁と心ゆてふゆく旅ゝりゝゝふふ。老女又いく。そゝいゝゝゝ
夏ゝり。卒ふゝるゝゝゝれど。我此娘見ゆふでゝく。身材高く生立ゆれどゝゝまゞさゞ
まる婿ふゝれた。明日ゝゝゝまれぬ此老が亡後ハいゝゆゝて世を去べきと。不便ふゝゝハ
親のゝゝひ。此山住のいぶせきといゝゝひゆふ心もゝゝくハゆん身と婿ふといひさゝて
娘とゝれた。ゞゞ見ハ顔赤ゝゝてゝゝゞゝひゆ。動之助ハ老女が詞ふゝゝゞひて。ゝゝ
樫子と探ゝゝれゝゝやゝゝゝゝゞ近くゝゝ。そゝありがゝれまゞふゝゞけゝれゝゝゝり。
今ゝゝゝゝゝゞ如く。水鳥の陸ふ迷足ゝれ蟹の爪のゝゝれた。此家の婿ゝゝの
ゆゝゞゝゝゝれ幸ゝりゝゝゝふゞ。老女ハ喜び善ハ急ゝゝふ言あれべ今夜假ふ婚姻
の盃ゝゝゝゝゝゝり。娘戸棚の酒ゝりて来よ。竈の下と焼ゝけよ。我ハ鬼を料理ーて

者ゆゑべーとつべ。娘はいとうれしう。俄に裨裙ひき結て母ーとこれに立てこーとき。
石の切机石乃料理終て石酒壷石の盃ーとりそろう。松吹風の颯々々と祝儀の
謡に聞て。三々九度もかりそめに。婚儀はやがてとこれにうり。老女は益ますて。何をかに
壻引出にとひつてあり屋にて。釜の蓋を手に把げ。今ーこれ釜の下の灰をでも。
壻どのにまるーまる。証いこれとき出せば。動之助これと受心ありげに引出物拙者
と何ぞ納采の品ーとべど。憂族うれた一物もーこりべどさてこれと。側にあり合
鍋蓋と把あげつ。破鍋をひきうけて。筑摩の祭数もうき。玉の器の娘子よ。
似合ぬ拙者は此緘蓋とき出ー。互に探る心と心謎へとけ祝どうちとけそこれ
娘まぐ山住に馴ぬ壻どの。ーこれ夜風とひきぬやうに心をつけよ。ーこりこれ
磯造の亭坐敷に屏風岩を風とる迎げた暖うるぞ。かーこーとを更壻どの
ゆーこーふ森ぬーこーふぞ。ーこーべーこーまーこれそ。動之助は立上り。娘が案内よ

打連てかーとの一間に入にり。あーこに老女眉を顰かの若者の為体ーこーく
ーこーふゆゑ。壻に望むにーこーとぞいよく合點ーこーるゆゑ。今世にーこべる足利の
家の紋二引両にさーこーる此釜の蓋は四海にもーこりに引出物なーこと謎を
かけーこ。足利方のまーこ者ーこんーこーこーふゆゑに。我も足利方に呼縁の者ーこと
ーこーこーこーこて与ーこーるに。彼又中黒の紋にさーこーる鍋蓋を。納采ーこと謎かけ
ーこ。我も南朝の味方と察ーこ。おのーこも南朝に心をよーこる者ーことーこーこて。我に
心とゆーこーこ。我素姓を探ーこ為の計畧ーこーこん。若年に似合ざる即坐の頓智
とーこべ。ーこる深山ーこ唯独のがり来つる大膽不敵。唯者にあーこれど。別ーこ
いーこる謀計ーこーこんーこーこーこ。大事は小事ーこりあやまーこーこれば。今夜のうちに
唯一打と独ーこーこづく折ーこーこれ。相圖の瓶磯に石蛤をとーこーこと打バ老女は心得
立出て戸を引あけた。燃石に火をとり。門方にひーこーこ手下の猟者泰亀ハ

泥九郎。山蛭の血平太。両人ひらくいひるゝ。先刻此山の半途にて。旅の若者を出あひ。矛と鐇を戦をして試つる。剣法を精熟し。もうこと早業にて我〻敵しがたゝ多ふ。這々逃退いたり。彼奴唯者にあらざる。此すゝ註進仕ると。いふとあつて。声高ふ笑ひのいふ。其若者ハ此方ふしらぬ。果して我推量よりまさるべ。いまく足利方のまん者にてゝ。我彼奴と今夜の中ふ打てやとおもひ。若打りこまかの磯造の亭坐敷の軒口ふ釣ゐ磬石を打べ。其方ふても貝石の螺と相間ふ吹合せ。かの活道とさへぎりて打とるべし。若又死地ふ入ばいのちを死べ。手とゞまるふ。又此方まで打とゝ。ゆ。祓て。もう合せおきてるかの相間とあぐべきぞ。此通手下の者ふ残ずあつくいひ聞せよと耳語ば。両人の者ハ打うゞき。早足と出して走去ぬ。老女ハ門をとゝ。石の刀を取出して腰ふあび。灯火を吹消て抜足して。

亭坐敷ふ歩ミ寄。様のうふ二足三足上りて。いかく娘が目を醒しめぐ必定妨もゞ。宿鳥をさゝやふ。もうゝまじと。巖ふ下りて床の下ふくゞ入。石乃刀を引抜て。突上る簀子のうふ。あるやとさけぶ。声りろしもふ流て血しわ。仕もゝうとりひつ。いそぐしく様を上り。明障子を蹋放して。月影ふ。もうゝふりひもゝぬ手下の猟者昼狐の髭四郎朱ふ染りてのゝ打つ。旅人と娘も居ぬ。やうとり逃せうとひとりごと。よて用意の雷椎を取上て掛もく相圖の磬石を打んとゝふ。屏風の陰より娘ひて火走出。其手ふもぐりてゝぐむしだ。老女ハ眼をいゝしつ。さへハ汝色ふ迷ひてかの若衆めを逃せ。かゆくき奴。こゝを放せと突倒して。又も打んと踏出も足ふ倒れ。ぐゝ取つて。手弱き力ふゝる娘老木の松ふ藤波のまとひつきる如くなり。娘ハ声をもうこと。こゝ母さぬ妾がいつこと聞てゝ日来

もん身のわき業此山ゐ迷ひ来る旅人をとらへ。剛臆とろくそ。強者い味方ゑつけ。弱者い打て捨又剛ものしぶそ味方ゐつく所うけひぶれを。手下の者ゐひつけて道をさへぎり殺さるゝ者幾人ゝゝゐ数をれど。其悪報いゝゝ非命ゐ死を者幾人ゝゝゐ数をれど。其悪報いゝゝ

もん身ゐかゝゝ〳〵〳〵と。平日ゐ妾が諫れしを。聞入めゝね無得心先刻此髭四郎が妾ゐさらわれ。得心せぬい母人のわきさ仕業をとゝるとゝ。ゆゑいかりて

うけひきてる体ゐのてゐ。しるゝ実ゝゝゝゝひ。ものび来つる。幸ゐ相間ゐ占鹿笛を吹ものび。よそ彼旅人を入るゝ。もん身の手ゐかけるゝ。訴人の難をのがれんとゐ。

旅人を逃せもまつて色ゐ迷ゐあゝゝ。生さるある若人を。殺人ゝゝのつさいゝく。

二ゐゆ母人ゐ罪つゝゝをいゝゝたるり。此のゝゝろと聞ゝて。其相圖の石をゝゝど。

何ゝそたゝけまつれ。泣くいゝを老女い益怒り。我心ゝゝ大望あり。汝等が知ゝゝゐあゝゝ。彼者を逃ゝてゐ。我家の指子他ゐ漏て。大望の妨ゝるゝた。

さゝるゝゐ人なるをゝゝ。故せくゝゝのつゝそゝひまゐ。髭四郎起上る。痛手ゐ

屈せぬ強氣者。さてゐ我をゝのゝせゝゐ殺さゝるゝゝ。ゐくさゝゝゝゝゝ。

訴人ゐゝゝゝと。ひつて岩下ゐ飛下る。折ゝゝゝ下ゐい血平太泥九郎両人

ひゝゝく来めつゝゝれゝ。老女い上より声をかけ。心変の髭四郎。それ打とゝ

下知をれゝ。二人い心得かけ。ひゝゝく石の刀と抜て斬つけるゝゐ。深

手ゐ弱らぬ髭四郎。あゝゝく刀と抜放て。二人と相手ゐ打合ぬ。老女も

益氣をいゝゝ。取つく娘を突退て。磬石と打鳴す。忽四方ゐ吹立る石乃

螺山響高くひゝき合ていゝゝゝゝく聞えつ。遥乃山間谷間ゐ許多

の明松ゐやゝてつゝなる星乃如くなゝ。娘い四方を見渡して。獨氣やく

身をとりゝゝつ。案内もをれぬ此山中のゆく道くゝゝゝゝゝゝて。彼お方いゝゝ

らゝど打まゝゝゝゝゝと歎く涙のひまゝゝゝ。圍ゝゝゝ退るゝる相圖ゝ

かねて聞知たりしと云ひ出して此方にかけ下り。埋火と外の方に持いでゝ曲玉壷にたくハへたる。蛍砂を掌に握て。火桶のうちに打入れハ火氣にあたさかひ蛍砂空に高くのぼりたるが。相圖を合する螺の音もやゝ明松の光も漸々に消るにぞ。娘ハやうやく安堵して。胸撫おろす時しもあれ何方のともしれず巌の陰よりあらハれ出て娘を捕へ口をおさへて小脇に抱行方もしれずなりにけり。老女ハこれを露しらず螺の音やゝ明松消しをいぶかりて。今ハ磐石をつゞけ打に打たるが。下の方を見おろせバ。血平太泥九郎の両人髭四郎に斬立られ危く見えたれバ。老女ハ雷槌をなげ捨て大きなる吸針石を取上つ。髭四郎がえりくびにあてがひて上よりこれをつなぐるに。血平太泥九郎の両人ハ石の刀。髭四郎が刀ハ常の鉄刀なれバ。吸針石の氣勢にひかれて。刀の手の裏狂ふ所を。二人の者ハ得たり

とうちかけて斬つけゝれバ。髭四郎ハつひに打まもて死してけり。此髭四郎ハ別人ならず是則前の月餘吾郎が住家の竹林にしのびて餘吾郎を打んとする堂左衛門が僕なり。原猿者なりし由。其後又此業として雲根の老女が手下となりしが。鹿笛の音にあざむかれて殺されし妻鹿と数多殺生する報なるべし　○去程に動之助ハいで主火が情によりて危急をまぬかれ色を背負て彼家を逃出。明松にかえよとて娘が与へる夜光石といふ物ハ。我身の四方五尺ばかりを照し。外より見れハ光なし。折ふし月雲かくれしく暗しといへども。かの石を以て道を照して走りけるにぞ。恰白昼を歩く如くなり。又娘が教るには。是より東の方遥先に路二條あり。一條を死地と号一條を活道と号。瑪瑙の巌聳る方ハ則死地なり。是立山の地獄につゞけり。三稜石をもって剣の山の如き巌あるなれバ行ことあたはず。水晶の巌ある

方へ活道ふて。則化石谷の下ふ出心安く林麓ふ至る道ありとゆふる故教の如く活道ふ入て走るふ。忽背後の方ふ磬石の音ひびくとひとしく四方ふ螺と吹合せ。許多の獠者等明松と振照して走集て動之助とりかこみ。手鑓山刀のさゞひの得物〳〵と打振てゞ向ひる。動之助へ止ことを得ず。両刀をぬきて左右の手ふ打振て。風の如くに打あひ。雲の如くふ多勢と相手ふ戦るゞ。剣法手練の早業に。斬立られ獠者等瓜の如くふ砍倒され。匏の如くふ打割れ。死人あり〳〵と入り立り。四方よりとりかこみて戦ふ間もなく戦まぞ。さしりふ猛き動之助双拳四手ふ敵〳〵。かゞく危く見える処ふ。夜霧深く立籠る裏ふ呼子笛の音聞えるゞ。忽黒き装束したる武士三人空木と出る荒熊の如き勢して走り出鉦とそろへて獠者等の群中ふ斬て入旋風の如くふ

ふめぐりて戦ふれば。獠者等ふ敵する夏あさはど。蛛の子と散ちぐ〳〵。四角八方へ逃散る。三人の武士ふ道暗れば長追ぜど。蒼所ふ皈りよ。動之助ふいざ〳〵。何等の人なれば我危急を救ひ。彼夜光石を以て三人の面を照し。一人ふ南方十字兵衛が児子南餘兵衛殘る二人ふ北岩倉の僕露助。山咲庄司が僕夢平なれば。こはありがたしとそ益のぶ〳〵ふ。南餘兵衛ふ拙者が主人山咲庄司君命によりて俄ふ旅立我輩を具して當國ふ到今此山の林麓ふ假名寺と寺ふ旅宿せり。あるふ扨身今夜獨此山ふ登ふ聞傳てあるくふれ。我輩を召汝等今夜彼山ふ登動之助若あらば救べしと命ぜられしよりて如此とゝべ。動之助ハ今ふてゞ庄司が厚意を感激し。四人ぶく休息して居ふ。ひの血平太泥九郎の両人石の刀を抜そろへ。岩の

磬石

霹靂礁

夜光石

蛇石

三稜石

石麸

蟹石

鏃石

おふーく

神代刀石

野曝石

燃石

醉醉軒

山月古柳画

小泉右京之助刀
左常吉刀

陸より歩を出動之助と南餘兵衛とじまり打ふと斬つけたり。此方乃二人いそがしく身をひらり。動之助ハ血平太が首をちらりと打おとす。南餘兵衛ハ泥九郎を腰車ゆ斬放し。両人一度ゆ刀をぬぐひて朝ゆ帰るるゆ。南餘兵衛動之助ゆ對ていとく。主人庄司ちんゆまことく密談ありとまうされしかれば一旦假名寺へおりて彼對面あるべしとの時已ゆ東ゆ。山鴉鳴さるれば四人ひとしく麓をさしてぞ下りける

○前ゆ庄司南餘兵衛ゆ對し。深山の濕地とりくどき遠く音を発する叶子笛をつくれ。他日おのづからちる時あるべしといひしゆ。果して此時用ゆらるぬ。

（十六）おりしろうて頓てかすみ鶏養の腹切

其磧礫を翫て。玉淵を窺ざる者ハ。未驪龍の蟠所を知ぞ其弊邑ゆ習て上邦を視ざる者ハ未英雄の纏所を知ぞとのる呉都賦を。おりしろうて越乃中國蛭牙山乃崖を背後ゆ。亀毛川の流ゆ兎角とのる村中ゆ。閑作とゆ鶏養あり。頭ゆ雪ハ戴と面ハ朱をそそぐ如く。古来稀る七十歳の翁しろうぬ岩畳作を営業ハ朝暮ゆ。亀毛川の鮎をとり。唯殺生を吏として。波の滴の腰蓑ゆ。露の命をつるぐ船。鶏舟ゆしをを篝火乃。消なん後の闇路をを更ゆ。ありぬ罪業ハ日々ゆ深くぞ。ありぬん。柄のひしゆ幾年を経をを。ぬ大木の古松あり。空ゆ注連をひきてゆ。様子ありげゆ見えにけを。比しを七月盂蘭盆の時。ありしゆ。盆中ハ殺生の業を休を。霊棚をとるつく。菰筵ゆ杉の葉垣茄子の牛に瓜の馬。椒の箸ゆ土器も土ゆ。ある人の為浄土の風ゆ瓔珞のゆしくゆ如く掛渡を。粟穂稈穂ゆ青匏瓜濁ゆ。ぬ蓮の葉を。露の手向と見えゆ。村中の鶏養等。中の招ゆ寄つどひ。

霊棚の前ゝ圓居して。百万遍を繰念珠の手つきも常ゝ手馴さる。鶏縄
さゝくゞ如くなり。あゞの閑作音頭取発願以至心皈命阿弥陀仏念仏衆
生接取不捨と。鉦打ゝ一越調の声もやゝる小屁風ゝ押散る追分繪乃
鬼の念仏ゝ異ゝ。老ゝる若き打交て。調子ちゞの六字詰ゝ巖ゝむす谷川乃。
黄顙魚の声ゝとゝゞゝし。尻声のゝ責念仏ゝ松の嵐ゝ鳴交る。秋の蟬
ゝとゝ。矢まゞゝ退屈の。念仏と奥歯ゝ噛くゞけゞ。いゞまも苦労
ゝゝ。願以此功徳平等ゝ。あゞゞゞゝ。鉦打ゝ念珠取ゝて。
閑作ゝ皆ゝゝ打向ひ。闇と好ゞ鶏養のゝ。月の半ゝ月夜ゝゝ。殊盆乃
中ゝゞゝもゝ休と幸ひ。明の十五日ゞ冥日ゝある亡者ゞある。今日の待夜ゝ
志乃百万遍。ゝゝつゝゝてゝゞゝし。心ぐゝりの蓮の飯。新酒ゝゝ
ゝ。あゝ乃ゝ盆中ゝ。鶏籠とひゝゝて。鶏笛ゝ楽ゝゝゝゝゝ罪ゝゝ。

こゝゝも盆ゞ骨休め。跰跨ゝ寐ゝ。心ゝゝゝ打ゝゝゝ。語りゝ。
ゝゝひて地獄の釜の蓋。あけて盛ゞ蓮の飯。薄き新酒の磁鐔酒精進
者ゝゝゝゝゝ出ゞ。遠慮會釋ゝ居る鶏養等。辞宜挨拶も
ゝゝゝ。施餓鬼ゝあゝる亡者の如く。或ゝ食或飲咽ゝ。
ゝるゝ。鶏養の罪とおゝゝゝぬ。ゝて漸時ゝゝて。暮影ゝ鳴晩蟬ゝ。
野辺の鶏ゝ音をゞゝ。芦花の風雪を散し。残螢の光灯と點じて。日も
ゝゝゝ暮ゝゝ。鶏養ゝゝ食いく醉て。我家くゝ飯ゝゝゝ。
此閑作ゝゝる下男ゝ。崩簗の呉呂藏ゝゝゝゝ。此時船ゝ檣さゝて
飯ゝ。岸の杙ゝ船を繋櫂をゝさげて裏ゝ入。詛声ゝて。最早念仏ゝゝ
まゝゝゝ。ん身独でさゞゝくゝゝゝん。今夜ゝ空ゝ雨気ゞゝ。
船ゝゝ苫をゝけまゝゝゝ。閑作唯々それいく氣ゞゝ。高燈籠ゝも

火を燃し。彼等が飲食を取散しる此器どもく取あつめよ。鶏ふも餌を飼
魂棚ふも灯明をそなへよ。とゝひつて樽を打かりて。五升ばかり此酒を滴も残さず
飲まつ。寐酒をくて寐つれぬ。何の用をあまつて。一走買て来よ。つゞ
豆腐小半丁線香二抱銭はかしこふ出してある。我は少刻休息をするぞと
いひ捨て。奥の一間ふ入ふ。呉呂藏は何れとまめやふ立ちて。門よ
立る高灯篭ふも火を点し。これであゝまー用はもむ。唯一走りとりつて
所が酒屋へ一里豆腐屋へ半道菖蒲が池の狼ふ油断がならぬと独言し
耀のうちふ樽とりて打かつぎ。明松をとぼして。いそがしげふ出去ぬ夫飛花
落葉のこゝろ観どれば。妻子珍宝何ぞ生死長夜の夢の世と驚
悟る人のるまゝ年若き修行者の笈を負錫杖をつき。打ちたる鉦の音
いろ〳〵松炭の。草葉ふ鳴が如くゆゑ。高灯篭を目當ふ来る。残螢の二ツ三ツ

風ふ乱れて露深き。葬の門ふ歩より。これい回國の修行者なるが。行暮て
難義ふあるふ。一夜の宿を乞報謝ふあるべきといひ入る。開作ハ一間を
出て門の戸をあけ。今月一ヶ月ふ亡霊を祭る日とゝひ亡なる人の待夜なるふ。
修行者のあはせ。こゝ幸なれば。ぜひ一夜とむるあれだ。ちゝぶ山ふ
修行者ハ裏ふ入草鞋をとゝけば。閑作ハ苦井の水を汲とりて足をあらはせ。
兼来の齊飯を調ぶる間同向をこゝいそぐ。いそぐ〳〵奥ふ入ぬ。修行
者ハ笈を卸こゝ。魂棚ふ向ひ居て。先ぶ位牌をとりなふ。延文四年
三月十五日打死。大仏九郎貞直霊。修行者ハこれをとりて。或ハ
落涙し或ハ悲むこゝきこゝ。落涙袖をぬらす。良ありて懐より香包を
取出して香を焼。鉦打鳴し。南無亡霊頓證仏果菩提。南無阿弥
陀仏南無仏とゝなへて。回向をしてゞ居る。時ふ香氣馥郁とこゝく。

家内ハ薫ト。世常ならぬ香なれば。閑作は一間の障子と細目ハあけて香の薫を訪む。かゝる折しも蛭牙山の雲根の老女。此門首ハ来かゝるそ。これも香氣と不思議ハ思ひ。窺居しが。何ゝ心ふかつれて。家の背後ハめぐり去。修行者は回向を終て。閑作は一間を出て修行者の側近く寄。今ハ身の手向ハ名香は楊貴妃の身摺しらん香なるやと問れた。修行者いとゝ。いかゝも終り。彼香をきて矢る和主の素姓は何人ぞやと問へば。閑作いとゝ。先ハ身の素姓をあらはれよ。其ゝ人ぞ我素姓とも語べし。といふハ修行者威儀をつくろひ。我実は相模次郎時行殿を守育し大仏九郎貞直が一子なり。とぞ。延文四年。信州苔形落城の刻戦場ぞ出生し。育る者物語まつ。父貞直打死とは聞しかど。存亡疑しれば。若法名して此世ハ

あらとゝめぐり會とのやと。かゝ修行者ハ身とやつし。諸國をめぐり歩ぶ。ふひとゝ此家ハ祭る亡父の位牌。そは打死ハきはまりしと。ゝかも落涙して。むすき位牌を拜夏よゝく薄き親子の縁亡父と祭る此家のあるゝ。必呼緑の者ありとゝふ。探んとハ焼る香は亡父の遺物。此香包と見るとよとさし出せば閑作は是と見て打驚き。いざ先これ〳〵と上坐にとして両手をつき。そは戦場ぞ生れし若君ぞ。今は何ぞつゝもがこと。拙者は父九郎貞直君ハ仕へ一郎時奥淵剣太とまうす者。そこに今夜めぐりあひ奉るもは父尊霊の導ぞふうぞひあり。父君は知具麻川ハ入水して底の水屑と成ぬ。明は冥日今夜は待夜間昔とおもひ出ぞとちとやと。拳とめぐりていひそれば。修行者は落涙して。さうふぞそ詞ぞ。閑作うなづいて。壁ハ耳あり墻ハ縫めあるとと

まうせん。端近ふて物語とり〻〻し。いざまくと案内して。奥の一間よ
いぞるひぬゆくて初更とやとぶて。雨雲の晴間よりれいづる月影乃。川波
てしを岸でひふ荷とゆるひて。心太と賣商人歩み来つ。此家乃門辺よ
荷とおろし。心太ゆ立らゝ寄くと入てゆ。心太の曲突とのぞきゆて見返まうゑと
声とやふいひれゝば。此村の鶏養等寄集心太の曲突とゝめゞしき商人。
いそのぞそ見るべしとそ取りゝゝべ。商人い嘯して。そゝ我商ふ心太へ伊豫の國
宇和島の名産ゆ。漢名へあまゝまゆ。和名へ古留毛波又ゝゝゝてい
ゝゝまゝもゆゑ。ところてんとゝゝゝゝまれるゆ「盃蘭盆乃あゝの秋の夜も
きゝゝ。月ふまゝ手や我ゝゝゝて」と詠る歌もゝゝれば。今ゝりゆゝの商
物ふゆゝ。ひそゝふゆ〻曲突とのぞきゆゝ。いそ〻見返まうゑとゝゝゆて。或
空ふ高く突あげて皿坏ふ受留或背後ゝゆふ突て肩と越ゝ或突く

股をゝらせ。或ハ突上て落る処と箸をゝて挾かゝ〻。いろ〻くさゆゝ
曲と尽して見せれた。鶏養等へ與ふ入さてもおりゝゝき商人ゝかゝと
ひゝゝゆて。我もゝくと心太とゝゝ食銭とゝゝへて立去ぬ。折ゝも川風颯と
吹て閑作ゝ魂棚の灯明と消を暗まゝゝふ。彼商人四辺とゝ見まゝ。ゝのび
入て魂棚ふゝゝゝゝ位牌と奪ひ懐ふゆ入て。荷とふゝひて行方も
ゝれゝゝりふゝ。時ふ庭の苔井の裏より。大なる蛇蠢出て。鶏の鳥
の雛とゝゝ傍辺の古松の空ふ入んとせゝゝ。忽地上ふ撲的ゆゝのゝゝら
まゝり死てゝ。彼修行者へ一間の障子と押わけて。眸とせゝ此体を
見居ゝゝゝゝ。ゆの空とゝそ怪れと心ふゆゝゝて打うゝゝ。松のゝゝふ
よゝんとせゝゝ。閑作へいそゝまゝゝて走ゝゝ。むふふまゝゝてゝゝゝ。
ゝゝそ偽者觀念せよとゝゝて。一腰と抜放て斬つれば。修行者へ

錫杖をとりのべて丁と受留又斬つる刄受ぎ。裏ふ仕籠ー刀を抜て丁々ちと打合ぬひて多時崩簗の呉呂藏い買物をとりのべて家路ふ飯る其跡より。以前の商人抜刀を背後ふくーて移ーひろ屋。肩尖のぞきそ斬つれ。呉呂藏へ身をひるがへーてこれを避。酒樽を投捨て櫂ふ仕籠ー刀を抜払へば退引い入来往去回の秘術を尽ー双方おーーぬ蝸牛の角裏ふい閑作修行者が互ふとびーー双の音外方ふい呉呂藏商人が火出るをりふ戦ーー。何ろひえん呉呂藏い巌の上ふ飛り上りて川ふざんぶと孤入つ。抜手をきりて游ゆく。商人い岸つーーふ跡をちーーひて追去ぬ。修行者い閑作が。電光石火とひーーと。刀の光ふ眼くーーと。勢猛ふ氣をのまれ。剣法乱れて敵ーーーく。ちでふ打るーーーるが。あーーを足を踏ーーつ。門ふ立る高灯籠の引綱をーーと斬れば。灯籠い

地上ふ落。銀河の星ー山ーくふ。つーーる明松旗捺物夜風ふ吹ぐ雲の波。陳鉦大鼓鯢波。亀毛川の濺音ふひびき合て。いーーーきまーぐぞ聞へる。閑作い刀を引向ふを屹と見渡ーて。シャめーーき金鼓のひびき。我を打べきや。わふ小黠やと冷笑油断と見とーーー修行者が。又斬つーる刀をーーと打落ー。手たやく側ふ引つけて。膝の下ふ敷ーる折ーも。雑兵計多かけ来る。鎗とひ絡りてつめ寄ーり。閑作い修行者を櫚退庭ふとり立身がまーーて。突来る鎗を左右ふ握る。一ーりぎーー二人一度よひるがーり。倒を上を飛越て又突ーーる鎗の血留を捽て。跳やれを鎗の手を放ち四五間飛で大勢の群中ふ倒れーり。ーーーーふ隙間をあく。鋩鋒をそろーて突鎗い篠をつーる急雨の如くひーーく光い電光乃。

山の端めぐる如くなれど。是を物の数とも せざと。飛龍のごとくふかめぐり。猛虎の如き勢ひして。前後ふ當る左右を支へ陸離々々と斬払へば。雑兵等は敵しく孫。志どろふ為て引退く。修行者は隙間をんそ。背後抱ふむどと組む。腰とひ移りて振かくる。襟首飼てうどうど。仁王立ふ立る処ふ。弦音高く鳴ひびて。白羽の箭飛来る。閑作が胸板を目と射るが。うつとかど矢幹ぐけて飛散ぬ。閑作へ呵々と打笑形も見ざと遠矢と射る早怯者。我身は鉄石の如弱矢の立べきやと。嘲彼方ふ声高く。

まてこそんと頼の雁の別路は待間ひさしき名残なりけり

と詠ひかけど一首の歌を吟ぜるふぞ。さしりの閑作おどろけば又いはく。大佛九郎さのこふさまだ七月影个谷判官の家臣喬元動之助氏邦見参ぜしと よぐてとて。遥向の木陰より。わくれ出て歩来る。其促装いふとるんべ。緑なる

額髪と玉なと顔ふ塗と振かけ。双蝶の金物打る顱巻を結とれ。小櫻威の腹巻ふ。丹地の錦の陣羽織と著下て。秋野の摺箔しる白精好の大口ふ。黄金作の太刀と鷗尻ふさげ佩て。頻藤の弓を小脇ふかい。こみ。物具の金物と月影ふ耀し。光滋て歩来る其形勢志氣堂々威風凛々る若武者なり。閑作い肩とゆとりて笑ひ。げふ名乗し故いふる荒武者ら出来とふ目ふ手ふ足ぎる小冠者原。討手の大将なんとしんくらいて。まのこふ。我とて大仏九郎と呼目い何の狂言貞直殿い知具麻川ふ入水まる代まるや。嗣殺い安らんしぐ。童を相手はうとげ目。汝ら命を汝ふ与へて目ふ。ちく飯れと高笑ひ。ふ不敵の詞動之助い少も臆ちるくきるく莞尓と笑入水しふ則偽人と欺死間の計畧今わくれてちちちくん先比鎌倉極楽寺の切通ふ於て。我養父背元滋右衛門を

遠矢かけ。日月の把ん雄を奪取しへ汝ること疑ひ。其證拠い是なり。腹巻の引合より。矢の根といざ。て目前ゆきつけ。此矢の根ゆおがえわ。ん。養父と射る此矢の根ハ。他國ゆまれる鏃石。我是を證拠ゆ仇をうづ。蛭牙山の麓ゆ宿アと。木梢の森の邪神人身供そうるうれしゝ。射る矢ゆうとふを見れど。今我射る白羽の矢そ。これも如ゝ石鏃。見れば。これで仇の手ゆアとうの人身供の棺ゆ入かの社ゆ到て試つるゑ。果て真の変化ゆ。移べいゆ。怪しかの山深く登て見るゆ。化石谷ゆ鏃石多ゆ。又石の刀を用ること鉄刀ゆ異ゆ。察る所梓覡とゆて月影千谷の地ん館ゆ入籠しも彼奇石ゆ洞ゆ住老女ゆ。曽十洲記ゆ。西海の流州ゆ昆吾石ゆ。剣ゆ作ゆ水精の如く。玉を割ゆ泥を切ゆ如し。又玉水素問を注して云。粛慎國の人枯木を以て矢ゆ。青石を鏃と。毒を施し。人ゆ中ゆ即死。これと石砮と号く。又勝洲ゆ青石を以て刀剣とうとと。銅鉄のごとしとゆ。汝これ等ゆ。化石谷の鏃石ゆ毒と施し。渋右衛門を射るゆ疑ゆ。兵具をとゆ向ゆう。養父の敵とゆ私ゆ知具麻川ゆ入水といけり活残て。足利殿と亡し北朝をうゆ九郎貞直と。くく本名名告べし。君命ゆり汝ゆ首を打取て。初陳の高名ゆをべきゆ。るゆ詞の舌剣ゆ勇気烈しゆ。閑作も。肝ゆ突る如くゆて。眼血ゆ。面色変頭の汗烟の如ゆ立のゆ。芦花の如くゆる鬢髭とそ。ゆゆひるゆ。牙と噛拳を握鼻をふきへり。堅庭を踏うして。我自意を蟠龍ゆ比して泥中ゆ蟄し。奥鰲と伍とゆ。して升天の時至るゆ待つゆ。汝等ゆ小冠者ゆ

乃あらんとれるくちくちよさるふてもいぶ〜ぶ。我苦形の戦場ふて。生子ふそそる香色の裏ふまるを〜一首の歌を。汝今吟ぜ〜いるあるを名ぞ。それ聞んといひれた。動之助唯々其不審理す。委語て聞ぶ。ふて腹巻の引合より位牌を出〜。我先刻南餘兵衛〜ふ者と心太責の商人ふ身を扮させ。奪ふ色此位牌ふ大仏九郎貞直霊とるを〜ふ是則養父の仇の形代す。かの豫讓が衣とさ〜る例ふ〜ひ今父の仇を報す。おりひまれやとよぶ〜ふ。太刀をとり〜ふと拔放〜て。位牌を切割ひそぶまく物具を脱捨て。雪の如くる層を推層脱太刀をさ〜ふ取直て。脇腹ふ突立す。大仏九郎ハ益いぶす。汝何ゆ自殺をるぞと問けぶ。動之助若き息をつきて云君恩ふ嚴命すれば黙止ぐて生ハ謀叛の張本を打手の大将ニッふハ産の恩ふ深き。養父の為の復讐公私

とワる忠孝ニッふのぶを夏のわるいざれた。死〜て親子の名告をせんと。其故ふ此自殺ふくいふ拙者ハ苦形の戦場ふて出生るをん身の實の子ぞるぞや。其證拠ふ見ゆ〜とて。陳羽織をさ〜いぶ是を着〜て打手ふ来〜ふて自殺の覚悟ぞといひそれた。さ〜ふの貞直肝ふれてぶつ〜と産〜。陳羽織とり上て好々ふるふ。まぶふ方ふに雲鶴の錦るれた。さて我子ぞあり〜と。猛心しよりつて。唯惘然るぞ切りす。良ありて修行者ふ打向ひ。先刻汝香色と證拠ふ〜ハ我子ぞりと名告〜ぶ苦形の落城と指折てぞれば今年で丁ど十八年。汝ぶ年のころやひハ二十と過〜〜とふるゆふ偽者と推量〜。我又汝とろりて郎等剣太と名告〜ハ汝とわざむを人質ふ取おん計略す。そそ汝ハ何者ぞと問れた。修行者云。汝自我名と位牌ふるて祭置ハ。死間の奇略と察せ〜ゆふ。動之助ぶ呼持るる香色と。假名寺の陳所

ふて受取かの香を焼て汝が心を試さう。我實は山咲庄司が一子山咲
餘吾郎雪村と云ふ者なり。先頃兄山咲窓閑が隠宅ふ紫の裝束まとく
まのび入朱塗の箱を奪出る曲者と。窓閑こゝろとうそ責問つるふ。大佛
九郎貞直が郎等。奥淵剣太と云ふ者なるが。南朝の帝。古今傳授の秘書
とりこめふふより。其秘書のあさめある此箱を奪出しと白状し。其時彼が
物語ふて。動之助が素姓をとゝく知つるなり。大仏九郎が存亡いかゞと。
責問しが。入水ふ疑なりとゝひて白状せざど。火水を以て責ふれども白状
自舌を喰切て死しるなり。先刻汝が奥淵剣太と名告しを実ゝ其ふ
其ゆゑなり。假名寺ふてもり合せ。此家ふ立し高燈篭を切落を相図と
さゞる。さてこそやいかゝとゝふふりこゝろ。貞直いく。我子い
背元渋右衛門ふ育られしる。あやまてり〳〵。渋右衛門い元来主君相摸太郎

殿を敵の手ふ渡て打しふる不忠至極の五大院左衛門が子なるゆゑ。
一ツふハ日月の陣旗を奪ん為。二ツふハせめて其子を打て相摸太郎殿の讐を
報ずんとそせしなるる。今おもへば恩を讐ふて復せしなり。こゝろぐるしあやまてり
と歎息しているた。動之助ハかゝ苦げふ息をつき。されバ生子のしらう
育らも。大恩うける養父の仇をもむくんとしれば。実父のもん身を打移ば
かゝ。それゆゑふ養父の仇を射ん心で。先刻射かけし白羽の矢ハ。
鏃をとゞまて射けしふ。養父の為ふハ弓を引。産の親ふ對して引ぬと
ふ心ゝて。是父子の義を二ツふ分ていづれを重る所なり。養父の敵が
実父ふてあんとゝ露ふハど。世界のうらの悪因果と。此身一ツふ引受て。
なるゝ者ハ我身なり。推量してよ父ゝと。いひてをぐふ這寄て。おとゝ涙い
血ロの。鮮血と共ふかゞ〳〵もて。烈火の如き貞直ゝ打ちれ。又陳羽織を

取上て。片手に介抱していたるに。苦形の戦場にて。汝が出生せしを。此雲鶴の地紋と幸ひ。此子の齢千歳の鶴にあやかれと。心に祝せしに。霜と悲む夜の霜子とおりふて泣為の。証に因果さよ。生まる時襁褓にしる此羽織が。今死ぬ時の経帷子に。うべしといそがおりひとくるべき。此錦いいる者が織りて。かれ因果とんぢやうのひて羽織をひしと抱きまる。萬夫不当の勇将。恩愛に大敵に。背後をうたれ泣居たり。時に不思議や荒鶏どもに。箠をとられて軒着し。嘴を鳴し動之助に取つきくるむを。動之助いかるやうきびに打ちて。岡絶し。此世のうちの板目鳥地獄の呵責。眼前。无慙なりるあり。此時月はふくらび又雲にかくれて暗なり。岸に繋し苫舟。山咲庄司雪森鉄巾野袴陳羽織。箠手膳揖に月とうるる。苫ふがりてあるふれ出かんとう

提灯振熒して門口に歩を寄。裏の板子とうがひぬ。貞直に聖霊を送る火の薪にと用意しもさるる麻幹とつるて火を燃し。明松にして熒し。動之助が荒鶏どもに責らる苦痛の体を屹と見て。且怪且悲き涙瀾然腰蓑に散りく。波の滴に異なるべ。蛭牙山の雲根の老女いつのにどふりつれ居る。此折二階の障子とひらきて在しる姿白髪の頭に髪紐錦の袿緋袴笛をいとく哀とそえふる。貞直涙と押のごひ。あかあさまにしや身の罪業を今ぞ知る。懺悔に罪と滅をと聞べ。我憂業のあるべし。

実や世れ中としとらで捨べきに其心更に夏川に。鶏つふとあるかりさよ。ある明松振立て。藤の衣の玉箒とひらきて取出を。志萬豆巣に巳わる鶏ども。此川波にふろと放せば。面白のありさまや。底ゆも

又ゆる篝火ふれどろく臭と追まい。かづきあげ。とくひあげ。のるく魚と
くふくと紀へ罪も報も後の世も。わとれとておりろや
其殺生の罪おり紀。親の因果が子ふ報荒鶏の責の不便さとそ。明松と
投つれた。鶏の鳥どもいぷろと退。動之助いつく息も。絶々ゆぞうりふくる。
雲根の老女も笛とあとそ。いそぶく二階とのそ。動之助とる紀抱き。苫形乃
戦場ふて。そうくる紀産る實の母。更級とる紀我身ゆ。産と其侭活別を
いづくふ居やとおりれーふ逢ゑ忽死別の歎さ。くくく薄き親子の縁いる
る者が親とゆ。子と生てい来るぞや。娘篝火が行方もれざるゆ。
爰へ来いせぬく。先刻爰へ尋ふ来て。門口ふ彷徨しが。修行者の焼とれ
香のつぶーさふ。裏口より立入て。招子へ残ど聞とりぬ。我子とい露もくど。
足利方のまいー者と察せーゆ。殺えんとまでとい。我悪業の報なり。

不便の者の最期やと声ありつくれた。手負へやくく起上て。さてい実の母人。
親子い一世と聞ゆれどよく顔見せて。母の手を握てつる。見わぐる顔
見おろと顔。大膽強氣の老女ゆれど。目とり涙。鬼薊ふ露おれ。わるぐとく
ゆり。先刻より門首ふ招ふと窺。山咲庄司。此時裏ふ走て入いふ大佛
九郎殿戦場ふていとふ面と見ちく紅ども。名いるて聞ゆん。月影介谷判官乃
家臣山咲庄司雪森と我支ゆり。陪臣ゆれども主人の名代ゆされよ。
我苫形と飯陳の折ゆ山風ふ吹落して。我手ふ入ー密昏の一通隠語を
以て記せー故事分明ふ。ゆとくと。當名い大仏九郎とあれど。入水せーい
偽ゆうんと。我推量ふ景てさぐれど。死間の奇略今ゆくれくそくと
ゆぐさんと。礼儀正ーくいぷれだ。貞直と威儀とくろい。さくん千騎方騎
とりて攻とも。物の数とゆ紅ども。子とゆりて大敵ふ。敗軍ーさゆ我ゆれど。

今にてまぼろしの我苦形の一戦ありてうちて。打死と心ときびを其へ折こそ
らば飛来る箭文の一通ひらきて見れば主君相模次郎時行殿隠語を以て
自筆かのまし奇密の文我虚腹と切て暗の城と落るゆゑ。汝し打紀
ると記されしゆゑ。こゝろ。知具麻川の入水と
見せて敵を欺きう紛て水練の達せしゆゑ。水底をくゞりて逃去ぬと
物語ふ。庄司いと。我こゝろ有りんと察せしゆゑ。主君判官梓覡が
詞を信ず。相模次郎殿苦形をそ実の死亡ありしこゝろ誤りう。時行
殿の行方いかゝと問るの貞直口でりていとぎりう。時の又陳鉦大鼓
と打鳴し。彼方の岩陰より二ツ弓両の旗とうとうとびして。月影小谷玉
兎之助身上あどそふふろひ露助夢平等両人の案内をそ岩上よ
出来て。声こゝやふいひるる。九郎貞直よく聞べし。我父判官照影此

足利殿かきこそ。北朝の帝か奏し奉て。南北両朝洪和睦あるべきこそ
定て。足利殿より吉野の皇居か進奏をる。洪和睦の盟書とまし受で
こそかゝり。もれかつき敕して時行と助命しかうしかつまど行方とまこそ
べしこゝひそれど。庄司と其詞の尾かつきて。そのこそいで聞んとぞ責こう
ゝる。時か老女もくを出其儀か妾が物語りん。そこそ相模次郎殿か箱根水飲
峠の合戦の後か深山幽谷の裏か塾しおりて。鎌倉かへ面と見知者ありと
幸ひ宮奴か身と扮き幣又と名のしを。こゝと妾ゝ従者の扶かわりて
世と志のゞ迎まうせしこゝ。又妾味方と集人為鎌倉と徘徊しこゝ時奇石
が洞かある蛇石と大指かくめて諸人と欺き蛇小谷の因果婆々と呼
しこ妾ゝ。其刻箕原蟻右衛門袴田紺九郎等と味方かつけしこゝ彼等
ゆりんぞこゝ浅きゆゑ。密夏かこれ出走して。其後戮せられこゝ。鎌倉の

風聞ふれと聞ぬ。又都ふあり時。五条坂の阿曽比。吾妻ゲ所持する
濡髪の名笛と奪しのふれい。原亡君相摸入道殿の秘蔵の笛なる故ふ。
扨人形身とも見だやとおりひて奪しゐ。則今吹さるゐ其笛ゐりとふ
ふぞ。餘吾郎いふれと聞老女とふくく乃ふ見知われだ。さてい其時我よ
やとふれる老女い扨人身ふてありしゐとふだ。老女い打うかづきて又いろく
げふめづらしき對面ゐり。其後妾太麻の覡女と名告て。ふたゝび鎌倉ふ
あしとふ月影个谷判官の息女。病ふ為むと聞。幸ひ時行殿宮奴よ
扮して鶴个岡ふおいせーゐる。覡女の嘱とふ月影个谷の館ふ入籠梓の
弓と載る器の裏ふ火氣と仕籠化石谷ふ生ぜる蛭石とふ奇石と
暗ふ洗米ふ交て蒔散し。火氣ふ乃ふ蛭の蠢やうふ見ゆ。と
洗米真ふ蛭ふ化しとふ。して欺さしも日月の侍旗と鶴个岡の神庫

より出さしむへき計略ゐり又我くく夫婦一ツ処ふ住ざるゐ人の疑といふ
ゐ。妾い蛭牙山ふ別居し。味方の者と撩者ふして山中ふとまる。
彼ゐふいひふきせて。木枯の森の邪神とふり。白羽の矢とまるしふ
ゐて人身御供と取しゐ其子と遠國ふ賣渡して。軍用金と貯ぬ獣の
皮ふ化石谷の天狗の爪石とふりの紙植て。これと妾ゐ手ふあり。真乃
変化と云せゐ。或い奇石洞化石谷の王石藥石と取出して黄金よ
替ぬ又碪ふ用ひる石の脛首い原化石谷ふ葬る。五大院左衛門ゐ死
骸の石ふ化しとふ。彼ゐ遺骨とゐ。相摸太郎殿の恨とゐ
為ふ碪ふして常ふ打ぬ。今見で人身御供とふり。人の子と奪ふ
我悪報忽我子の身ふ報ひる夏目の罪科と。滅せんゐの懺悔ゐ
此家の下人崩築の呉呂藏とふい則宮奴の幣又ふて。実い相摸次郎時行殿よ

はりぺよく助命なれり。妻は過る元弘三年鎌倉にて打死しける。長崎勘解由左衛門為基が妹なり。素姓と語るとぞうやとかの侍所庄司いとくさしでらそ女ふまれる。謄氣の烈しさ。抑身を夫婦いもうとなる人なるよ忠義を似さしぞ。善とおもて行とせぞる支惜ひべ残念さよ。崩簒の呉呂藏しかの時行殿ふ疑ふしと。我推量ふ露さぐらど。助命の儀は氣づくあるおとのべそれど。老女いろ。それ聞べりやや此世ふ望ふし。我子と共ふ死出三途の旅立せん。去かうう娘ひぐ至火ふあんでおるが残念なり。南無あさぐ仏と唱て。懐剣吭ふ突立ぬ貞直も居直て。今妻の語しこぐく。夫婦ころと尽しさるぐの罪とたくりて貯る軍用金は。まさうの時の鎧腹巻これ取たよと諸層脱べ肌着ふひしと許多の黄金と縫つけて。鵜の羽とうう孫しぐくなり。動之助ろ射る箭幹のぐけ散しくこうろう

貞直又ひなる。両朝のあん和睦さるうふ。時行殿の助命あれべ我望外ふ。唯一目あひたい娘ひぐ至火行方ぬ不思議なり。親の死目ふあはざるは。宿世なるうと落涙しべ。歎ふ沈しぐ。此と心とうう[illegible]。大音あげて名乗なは桓武天皇第五の皇子。葛原親王ふ三代の孫平将軍貞盛より十三代相模入道高時の内ふ鬼神とうぐれる。大仏九郎貞直と蜜元動之助氏邦。初陣ふ打しうう。手柄と見やと讃やと自しぐ。肌着とくつろげ刀と腹ふ突立ぬ。山咲庄司立寄て。天晴由々敷打死やと賞養して。餘吾郎ふ打向ひ。汝が奪し人質いりやや用ふ。父母の死目ふせてあしうよ。ひなる餘吾郎心得て。笈の扉とひらくとおそと共裏うまひび出しん則是ぐ至火なり。父ふ取つき母ふ取つき。動之助ふ取つて。ああさうさと迷ひて。声ありて泣さけびがべと伏て身とりぐえ。現心も

かるに。良ありて起上と。動之助うろたえ来る。石の矢の根と取手もなんせば。
吭より突立んとすると。老女更級いそぎ〳〵おしとゞめ。こや娘せめて汝を
生残せ。我〳〵が亡後の追善供養香花を手向てくれよといふを娘は声
かれに。今笈の裏かへてくれん支とうけまつる。動之助殿〳〵。妾ら兄を
おいもとめ。それにもそなたにかゝる。意の重荷と身に負て。石の枕に假寝せ此世
にかゝる畜生道おどろかしく居らべきと。いひて又打伏て泣沈む。貞直いと
其儀おしばらく。汝は原我実子にあらず。十四年前我鎌倉とうぐんに
志のびて立越る道武藏の篭手差原にて。大鷲四歳なりの児と喰合く
なる所見つけて鷲を殺し。其児を取て立帰る。育上しは則汝なり。
さるにより動之助と兄弟とし。物語る。庄司はこれを聞とし。其児の
高頬に黒痣あるにいとゞ〳〵問れば。貞直いとゞ和主はいかに

去て去りなるぞ。いふかし高頬に黒痣今にあり。それ〳〵よと突出す。庄司
つくづく打まもり。さて〳〵我子の小雪にうりとあひて。甘縄の神支の
鷲にさらはれしを居る餘吾郎とふは汝兄なり。
物語をそれに居る餘吾郎に打向ひ。
ゞ是火にさて〳〵妾が實の父實の兄にあらんとて。庄司餘吾郎に打向ひ。
ぶと又涙ぐり。貞直夫婦は痛手に屈せず我〳〵夫婦死しるあらん。
謀叛人の娘と人に指され。路頭に袖とひろげても。情とかける人なく。憂目
と見えとかげ〳〵くおりひしれ。そしゞ實父にめぐり會手後をれば我〳〵冥途
までの忘念なり。ようこそやと夫婦の者。るぐにひれば庄司は刀を
もつてしと抜ぐ是火が緑の髪と切取て。今より汝尼となり。貞直夫婦の
菩提ととむ。養育の大恩に報せよ。やよ動之助夫婦は二世とかうれば。
後の世は此娘と。汝が妻にすれよ。此切髪は聟引出冥途の土産と

持去と落涙して手を洗せど。動之助はおー戴唯掌と合だうう。
貞直は莞爾と笑ひ。あかうまーやうくーや。我も又納采のまー
ーて。娘のあるる物ありとて。左の小脇を突立る刀を手とり。右乃
傍腹まで切目長く掻破て中る腸と手繰出し。傍辺の松の空よ
投へうふ。忽枝葉動揺し。血しわの織と忌るのや。空の中ゝ風を
生じ。白木の箱と吹上さう。餘吾郎手ぞやくこれとうてひくきはるる。
是則日月のあん旗なれむ。其まま玉兎之助のなる。玉兎之助いこれと取て
うやしく押戴両朝のあん和睦をむまでぶ。此あん旗はおのれ
あづかるべーて取あるるーて。再又陣鉦大鼓と乱調の打ぶ。折も
烈き川風の一間の障子と吹倒ぜ。迫の足波を亀毛川。四方の山のあん
旗捺物陸のあい明松川のあい篝火天と焦ぜるーく。そ。水のも暉くの光

南餘兵衛が下知のもとぶ。鵜養ども数多の船と漕出して。崩築の
呉呂藏が乗る船と取ぶ。呉呂藏は相模次郎時行と本名を
名告て。阿修羅王のあれさうんもりくやとおりの勢めて。寄来る鵜養と
手玉のとり。投こむ水音水煙おめたさけびて。戰声。川波の漲音ふひーき
合て。ときまーのりる光景ぞ。貞直夫婦はうんと云て。助命とのいつり
おやと訝べ。玉兎之助ひるふ。ぞ疑ふ。諸軍とりひど鵜養どもと
戰ふ。足利殿（のうえだう）助命はもーもいつりあーぶ。いで我自立越て時行
殿の對面し。和睦助命の盟書と渡して戰とやうさぶーーふ。側のつき
そふ露助夢平心得て馬引寄きべ玉兎之助のーまと云。一鞭あてん
ーーと。動之助が死別とうあーと。きぶーたるたよ唐綾の鎧の袖よ
おちける。涙とあふ。露助夢平いづれも續と下知して。山と巡て走去ぬ。

程なく彼方へ揚貝と吹立るとひしひしく。陸の明松船の篝火。一度に消て忽暗夜の如くなり。戰声も已み止て。唯松風と川波の漲る音のみ残る。貞直夫婦へ安堵の体。庄司へ夫婦ふたりもひ。扨又等の集金へ鎌倉葛西谷の東勝寺へ奇附すて。相摸入道殿一門の菩提ととふべき料とて。又人身供とろりて奪る。子どもら等の苦へとなげき。身とわざわひて其親くみくしつゝもべ。又高徳乃僧と名しべ。化石谷の小石とろ。たとへ宗旨いちぶとも利益ふうきさ法華経の題目と。一石へ一字づゝ書ちらそ。此川へ沈め。おん身等親子三人の仏果菩提のためとべーと。扨言へ経石とも鵜養石とも云傳て。末の世までも残る。夫婦へ益感激し。今へもとて吹ひさ切く伏る。動之助もしきへ吹とうき切て。夫婦親子三人が一度へ息と引沙へ水のあわれを残しる。此火独生残る歎へ筆へ尽されぞ。貞直行年七十歳。更級行年六十歳。動之助行年十八歳とぞ聞えける。時も時なる魂棚の。瓜や茄子と其供ゑ。手向ふるや亀毛川西方浄土へおくり火の。鵜舟と弘誓の船とも。稲葉の露へ浮雲も。法花の法のたとけ船。一葉の秋と散て行。鳴音へ聞き電馬の。髪題目乃功力へて。實相の風吹て。真如の月の出ぬれば。山咲庄司へ餘吾郎と親子三人の亡骸の葬と懇へ命じて。娘も。べー此家へ。佛事供養を営べーとへ折しも。南餘兵衛走来る。相撲次郎時行殿和睦の盟書と内見へ。情へ。むへ剣すーて戦を止。王兒君とも へ假名寺の陳所へ打越とべ。庄司へ聞。ぐべ我も急ぐべーとて。餘兵衛と具ー歎と跡へ残して。假名寺とて出去ぬ。

右ふ記し残せし文あり。苫形の戦の時奥淵剣太主人大仏九郎の生子とあづり山越ふ落行しが。鎌倉勢ふ取こまれてせん方なく。生子を山神の社の裏ふ隠し置身ひふりて戦しが。嘴元渋右衛門駕籠の塵兵衛と云ひし時其社の前を過生子乃泣声を聞つけて捨子ありと云ひ陳羽織ふてみ香包とそえるとそ。なるくの人の子ふわるるを知不便ふ思ひひろひとりてかりぬ。剣太い鎌倉勢と追ちらのて旧所ふ飯王社の裏を見るふ。生子ふ乳を大ふ泣しかとそふ自殺せんとしるが。主人の妻更級の行方をとづねるふ生ずるに。其後山咲窓閑が家ふ忍び入て捕まる時物語れる文と。渋右衛門がかりて動之助ふ語りおきるゆと。符合する以て。動之助い苫形の戦場ふて生まれる大仏九郎が子ありといふこと

わきまへふ知る事。此子細と前回ふ一入くどくしけれど此ゑ別記して。看官の疑を解のみ

十七　鶴ありて日こそあり

去程ふ相模次郎時行い。和睦の盟書を携て吉野の皇居ふ到る。是を進奏しるふ。南朝の帝叡慮ところ〻ぶ。己ふ南北両朝陸和睦とのひ乳べ。時行今い望ありとて剃髪し。仏門ふ入日月のあん旗い奮の如く鶴ヶ岡の神庫ふおきむ。苫形の合戦ふ大仏九郎の亡しまで。都月影ヶ谷判官父子の武略よりて。父子ともふ位階昇進あり。これふよりて王鬼之助前の不行跡と悔おりひて。文武とそびむの外他事ふ。妹姫い病全快して。梅ヶ谷郡領の嫡子ふ嫁し。両家むつを深し。又山咲庄司が忠義軍功抜群ありとて加増とまりるれば。児子餘吾郎と

飯桑孟。あつまりて吾妻と婚姻を取むすびぬ。庄司が妻淀瀬が娘びつくまぐらに。南餘兵衛をもて飯桑孟。亡父南方十字兵衛が禄を加増して与へられ盆母が孝を尽し。窓太郎を養育し。朝烏の刀を家宝とし。孝子の誉名世に高く聞えぬ。嘗元渋右衛門が妻於破矢が嫉妬

とく尼となり。篝火の尼と共に鎌倉霧が沢の月輪寺の境内に庵をむすびて住大仏九郎夫婦。ならび渋右衛門。動之助堂左衛門等が菩提とする。五大院左衛門が五輪の塔を月輪寺のほとりに建其下に彼石の腕首を埋てあるとなん。放駒の小柄の小刀も同寺に寄附し

ぬるとなん。又大仏九郎夫婦が集むる金は相摸入道一門の自殺あり東勝寺に寄附し。濡髪の名笛楊貴妃の身摺の名香のなどりも同寺にあるて寺宝とす。僕露助は武士に取立られて餘吾郎に仕へ。

妻於関と共に益忠勤をとげぬ。僕夢平も武士にあるて庄司に仕へ。玉兎之助は衆僧を供養して。白拍子都。動之助等両人の菩提の為とす。餘吾郎は紀州高野山に祠堂金二百両とおさめ。祖父の霊を祭て前の罪をあがなひ又十字兵衛が霊を祭ること懇なり。蛙鳴丸の刀を家宝とし。かの竹の刀は一生守刀にして自短氣とつねに山咲窓閑は古今傳授の秘書を南朝の帝に奉る。玉兎之助は扶持を受て隠者となり。狂言綺語を翻して。讃仏乗の因。轉法輪の縁とし。白拍子都が菩提とする尊し。其名は後世に朽ぢ。燕子花の句。夏の沢水の匂。人口に膾炙して。今の世までもいひてふ。そもそも明神とは王法なり。暗き所には天罰あり。隠悪とはいへども必報あり。悪人且盛なるも餘殃の風にくだけて其枝葉を枯し。善人一旦衰るも餘慶の春に

あひて。再花咲時ふあり。皆是天理のきはまる所なり。さるゝば浮世乃興亡栄枯人生の禍福吉凶一部の小説ふ異なるこなし。其巻末とえぎれば暁ー得こゝあさいど。豈悟ざるべや

京傳店
自画賛扇彩図帋
讀書丸 一てみ
大極上品奇應丸 一ぷくう 十二文
十三味 水晶粉 一包 一分二下
京山てんてく 玉石混下左ちをたのめ
むだ一つけ茶 珊瑚碎 一袋 二分
江戸京橋南 山東京傳店

雙蝶記巻之六終 全部大尾

江戸 醒醒齋山東京傳編
一陽齋歌川豊國畫
備寫 橋本徳瓶
刷人 小泉新八

山東京傳著 永壽堂 近刻
雑劇考古録
一名一目千古集
前編大本五冊近刻
女めぐき若衆うぶきこゝて今の狂云尽ー野郎うぶ
よりくる寛永正保の浄の古画元禄以前の
役者の傳 江戸中橋の芝居古雅高風の芸の考
狂ぎ所ふ芝居ありし府の考へ入りやくもやつ役ぐん
つけ記うるうー入まれ三の浄芝居ふ
うつ入まれ三の浄芝居ふ
謹沢引くおくく考をまりー昔ふ芝居のかりうきふを
甚世ふまれあらそ目前ふ見るぐこと我 随筆まり
京傳自画賛扇彩讀書丸京山製 水晶粉 取次所 大坂 ちんさんをー通りからりの町 河内屋太助

永壽堂近刻繪入讀本并繪草紙合卷目録

盛衰記 山東京傳作 青黄赤白黑
五色の狂言 全部五冊 歌川豊國画 繪入讀本

青色の一回ハ主ゝ黄色の一回ハきるゝ狂言ゝてつゝたゝひゞ白色の一回ハ幽霊中の幽霊白いとおぐゝの武者白鷺白梅白菊のゝぐひ鳥獣草木業物大道具小道具衣裳おいるまで白き物だりとあるめて一回をつゝる五色ゝりふゝあるりめゞしき趣向の繪入讀本之

大晦日かけ取物語 繪入讀本 賢愚貪福かけ取たてるゝもあり
山東京傳作 全部五冊 十一回ふつゝるゝ狂言作の繪入讀本

山東京傳編
實方雀物語 繪入讀本 実方朝臣小野小町の亡霊にあふゝあるゝ乃ゝきれ
柳川重信画 全部六冊 刈字摺石乃由来あそぬまのおしゝる恩ふむゝふゝる
孫太郎虫のいとゝるもゝべて東奥近国の故事をあ川めて一部の物語ふつゝるゝ

父辰狂女手車の之義 琴声美人傳 全九冊 山東京傳作 歌川豊國画
秋式ゲ櫻花の諫言 奥州ゲ時鳥の無文 五絃集半面美人 全九冊 此二編絵入草紙合卷ふゝ

文化十年癸酉九月發行

書林 江戸馬喰町二町目 永壽堂 西村屋與八
大坂心齋橋通唐物町 文金堂 河内屋太助
梓行